

世界人口の激増と地球の全面的開発――日本の責務

西野入 徳

目次

- 一 人口と食糧の根本問題
- 二 人類増加の将来
- 三 地球の食糧生産の将来
- 四 世界人口食糧政策
- 五 日本の責務
- 1 日本の人口・食糧の現状
- 2 日本の採るべき人口・食糧政策

一 人口と食糧の根本問題

万能を誇る現代科学の総力を傾注しようとも、なおかつ満足な説明が不可能である幾多の謎と神秘とに鎖されているばかりでなく、更に、無限進歩の将来性をも抱擁する真に不可思議極まるこの人間と称する霊長動物は、その始祖アダムとエバの一夫婦が天地の創造後、間もなく、その裸姿をエデンの園に現わして以来、月の世界、星の彼方にまで飛行機が飛び廻る物凄い科学的活動の旺盛なこの現代に至るまでの長長長時間に亘り、日と共に殖え、月と俱に増

① 糧食所要年間1人1人

種類 分量	穀物	肉類	乳	ジャガイモ ジャイ	砂糖	青物	果物	卵	植物油	計
実量	kg 80	40	292	80	24	120	120	14	5	kg
穀物に 換算量	80	160	72.9	20	24	16	18.7	58	10	459.6

し、ついに地球上の五大陸全面に打ち広がり、その総数今や無慮四十億の巨数に達したばかりでなく、更に年々約2%、八千万人ずつ増加しつつある。このように物凄く増加しつつある不思議な人間なる者のその前途果して如何なり行くことであろうか？更に驚くことは彼等が年々消費する食糧が真に莫大の量に達することである。今かりに一人一日の平均所要食糧のカロリーを二千四百と見做して、その一ケ年間に消費する蛋白、脂肪、含水炭素、其他のすべてを穀物に換算すると上表が示すように約四六〇kg（白米約三石）となり、これを基礎として総人口四十億の一ケ年所要食糧を計算すると驚くなかれ、約二十二億トンの大量となる。

翻って現存地球上全農耕地の生産食糧と、そして海洋全域から獲得採取する各種食糧との総量を概算すると、年により若干の差を示すは論を俟たぬが、その平均年産額は約十三億トンに過ぎず、前記所要量二十三億トンに比し、約十億トンの不足を示す。従ってわれわれ人類のうち、充分の栄養を摂取し得る者は、ただ恵まれた一少部分の人だけであって、その大部分は、これを意識すると否とに関らず、食糧不足、栄養失調状態に陥っているのである。必然の結果として、個人的はたまた社会的に、種々様々の問題を惹起せずにはおかぬようになることは、これ全く生理的必然現象であって真にやむを得ない残念なことである。そこで、かかる人口と食糧との甚だしい不均衡を是正して真に調和安全を保持する幸福な世界を実現し得る健全な人口食糧政策を一日も早く確立断行することの必要を痛感せ

将来の世界人口推計表

②

年 地域	年 1970	2000	2025	2050	2075	2100	2125	2150
全 世 界	百万 3,649	7,843	17,224	41,224	102,846	262,791	681,333	1,784,063
先 進 国	1,090	1,454	1,700	1,836	1,874	1,877	1,877	1,875
開発途上国	2,559	6,390	15,524	39,388	100,971	260,914	679,457	1,782,188

ずには居れない。然らばその重要政策は如何にあるべきか？ その根本原理は那邊に存するか？ 結局それは大別して二種類となる。其第一は家族計画と称し性生活を営みながら何かの形態による避妊によって、人口増加を抑える消極方策であり、其第二は人口の増加を不自然に妨害せず、進んで叡知を絞り精気を揮いつつ正々堂々と前進また前進、全地球を見事に開発し、もって必要食糧の増産に最善を尽し増加するすべての人口に充分の食糧を供給して幸福な生活を営ませる積極策である。

さてわれわれは、この二途の何れを採ることが賢明であるか？ その決定前、(一)先づ将来の世界人口動態の趨勢を研め、(二)同時に其食糧増産の可能性を極めて慎重精密に検討すると共に、前記の消極、積極両政策の本質と、その人類将来の真の幸福に及ぼす影響とを充分に研究した後、最善の途を選ぶことが最も肝要である。依ってこれらに関しその要点をつぎに述べる。

二 人類増加の将来

まず人口の増加力の前途について検討を進めよう。現在四十億を数える総人口は将来如何様に増加するであろうか。国際連合人口部の推計によるとそれは上表の通りである。①

すなわち世界の総人口は億を単位とする概数によると、1970年の36億から180年後の2150

年の約一兆八千億へと約489倍に増加する。そしてその内訳を見ると先進国は約10億9千万から約18億7千万へと僅かに1.8倍の増加に過ぎないのに開発途上国は約25億6千万から約1兆7千8百40億と約690倍に激増するものと推算されている。しかし実際には必ずしもこの通りには増加しないであろう。なぜかといえば、この推計は現在の年増加率2%が将来180年間一定不変に継続するものとの仮定の上に立ってなされているが、事実上人口動態は時の経過と共に各民族それぞれ自然に相異った経過を辿り決して一樣ではない。

そして百八十年の長期間に亘るその変動を総覧すると中間の上下は暫らく措き、最後の二一五〇年の増加率は最初の一九七〇年のそれよりもはるかに小となる可能性が頗る強大である。なぜかと云えば、民族生命は、個人生命同様、第一期若年期、第二期壮年期、第三期老年期の三段階を通過する。そしてその第一期に於ては通例文化幼稚、教育程度、生活水準、何れも低く、人口は多産多死であるにも関らず、その自然増加率は相当に高い。

しかしやがて第二の壮年期に入るとともに文化程度高まり、教育は全国的にあまねく普及し、衛生設備また大いに発達し、必然の結果として死亡率はますます低下する。しかし、その生活程度は文化の急速な向上に比し比較的なお簡素である。そしてその精神は質実剛健であり克己心強く、しかも経済的には余裕がある。いきおい晩婚とならず、また不自然な避妊の誘惑に陥る危険も少ないので出生率は左程低下しない。従ってその自然増加率は第一期ほどではないにしても、相当高率を保持している。しかし第三の老年期に突入すると情勢は一変し、国民一般が長期間に亘り文化生活を営んだ結果、その欲望の範囲が拡大すると共に、その程度もまた高まって来る。小供の教育に其例をとると最早単に義務教育だけに満足出来ず、実力の有無如何をも考慮せずわれもと頻りに高等学府へと押し寄せ、る。しかし入学後必ずしも其全部が熱心に勉学せず、また卒業後もそれ程奮闘的でもない。にも関らずその生活程度

ますます高まり、健康と活動力維持とに必要な範囲を逸脱して贅沢と享樂との程度が、日と共に高進し、やがてそれがいわゆる「慣性となり」最初のうちは贅沢、身分不相応な享樂と考え、ただ時折これを楽しむ程度に過ぎなかった事物が、今は変じて、生活必需条件と化するばかりでなく、更に意識、無意識の間にその程度が日と共に更に高まって行く。必然の結果として、「脳神経細胞の機能と生殖細胞の機能とは逆行する」というスパンサーの人口原理によって、教育程度が高まり脳神経使用度が高まれば高まる程、出生力は、産児制限等何等の意識的阻止行為が無くとも自然に低下することを免れ得ない。他方生活程度が向上して栄養状態が良好となり長寿を保つに伴いその妊孕力は生物学的に自ら低下することはこれ全く生命自然界の原則である。このようにして第三の老年期に達した民族は、その持つ高度の教育と高級の生活程度とにより、生物学的に自然にその出生率が低下する。加うるに彼等はその子女の高等教育推進ならびに高度生活水準維持推進とのために第一期および第二期時代よりも多額の経費を必要とし、そこに経済的圧迫感が日と共に強まらざるを得ない。ここに於て一方経済的圧力を緩和するために、他方子女養育教育の重荷を軽減しようとの欲求から、先ず避妊、更に深く入りして堕胎の誘惑にさえ陥る傾向が日と共に強まることを免れ得ない。これらの生理的、心理的、社会的、経済的諸事情相俟って、第三の老年期に入った国家民族の出生率は、不可避免的に低下し、反対にその死亡率は、老令人口比率の上昇に伴い、ますます上昇の方向を辿り、必然の結果としてその自然増加率は漸減して、ついに停止段階にはいる。もし避妊等の悪行物に感染して居れば、その人口減少率が加速し民族自滅の期を一層早やめる危険が伴う。

さてこの民族生命進化の立場から地球上に現存する四十億の人口を一瞥すると其生長段階は決して一様ではなく、その大部分を占める開発途上国の多くは第一期にそして先進国の殆んど全部は第三期に属し、ただ開発途上国の上部

と先進国の下部とが相合して中間の第二期を構成しているに過ぎない。従って現在に於てはこれら諸国諸民族の自然増加率変化は区々様々である。しかし二一五〇年までの一八〇年間には何れの人種民族も相当の進歩向上を遂げ、必然の結果として現在第一期にある大人口の大部分は第二期または第三期に進んで人口増加率は必然的に逓減する。他方第二期第三期にある人口は停止または減少するに至るであろうことは人口学原理により必然である。従って二一五〇年の世界人口は前表の国連人口部推算の一兆七千八百四十余億に達しないことは明々白々である。

三 地球の食糧生産力

然らば地球将来の生産力の可能性は如何であるか。これに関しては幾多の専門家がこれを研究発表している。ここにその一つ、ソ連農芸科学研究所長K・M・マリン博士が一九六五年ユーゴスラビア首都ベルグレードに於て国連主催の下に開催された第二回世界人口会議に於て『地球の食糧資源』と題して発表されたものを基礎としてその大略をつぎに述べる。^③さて、地球の総面積は約五億一千万 K^2m^2 に及び、その約70%三億六千百万 K^2m^2 が海洋であり、残る一億四千八百九十万 K^2m^2 （約30%）が陸地である。しかしこの中、極寒の南極大陸千三百六十万 K^2m^2 を控除した一億三千五百三十万 K^2m^2 （約26・5%）が通例陸地面積として取扱われている。そしてこの陸地の約10%千四百万 K^2m^2 だけが現在農耕地となっており、そこから生産される動物性植物性すべての農産物と海産食料との合計の栄養価を穀物に換算するとそれは大略十三億トンに過ぎぬことは既述の通りである。人間一人一日の生活所要食糧を前述のように穀物に換算して二千四百カロリーとすれば約二十六億の人口に充分の栄養を供し得るに過ぎない。換言すれば一九七五年頭初の世界人口を四十億とすれば、約十四億人分の食糧が不足しているわけである。しかしこれら全世界農耕

地の大部分は現在其耕作方法が甚だ粗放であつて、農地の潜在生産力を充分に發揮して居らない。もしこれらすべての農地に対し、日本一般農業程度に集約営農を実施すればこの地域の農業生産額を優に現在の五倍以上に増加し、百三十余億の人口に充分の食料を供給することが出来る。更にロンドン大学教授ベックマン博士最近の発表によると、^④世界各国農耕地がもしその営農法改善標準を日本農業ではなく、一層集約科学的に經營されているオランダ農業にあれば、現在の全世界から約六百億の人口を支持するだけの食料を生産し得るばかりでなく、今後農業技術の大幅改善により、地球の人口支持力がますます増大するのは必然である。かつまた世界には豊沃な可耕未開発地域が頗る多量に存在し、中南米、加奈陀、濠州等に眠る広野は申すに及ばず、其他アフリカ、日本をも含めたアジア、ならびに欧州諸大陸の丘陵、河畔、海辺等には、少しく人工を加えさえすれば、見事な農地と化する良地域が、空しく放置されている個所が、決して少くない。

そして、これらの未開発地域中最も生産力増強可能性の大きいものは、南米およびアフリカの熱帯地域である。特に南米の北部アマゾン川流域、いわゆるアマゾニアが包蔵する天然資源の豊かさはすばらしいものである。この宝庫は単にブラジル一国だけではなく、同大陸の西方太平洋に近いペルーのアンデス山脈に水源を有する大小幾多の河川が一部は東南に流れてボリピア、ブラジルを潤し、一部は東北に走ってエクアドル、コロンビア、ヴェネゼラ、ギアナ等の諸国を豊かにした後に大西洋に注いでおり、その流域面積は、日本国土の三十倍以上に及ぶ真に老大な天然宝庫である。しかもその大部分は青々たる原生林が繁茂する無人の大平原と一部の丘陵高原地帯とであつて、これに現代文明を賢明に運用開発すれば、今直ちに数十億更に進んで数百億人口の食糧を充分に生産することが可能である。他方アフリカは、この西方未開発地アマゾニアと相対立する東方熱帯未開の宝庫であつてその面積はアマゾニアの数

倍に及ぶ広大な地域を占めている。このアフリカ大陸の地勢はアマゾニアのそれとは大いにその趣を異にし、その東北部だけは比較的平坦に富むけれども、それ以外の大部分は山岳および丘陵地帯が多く、海拔高度種々様々であり、従って気候また必ずしも全地域悉くが暑熱酷烈ではなく、温帯の気候に近い地域が決して少くない。これらの地域を中心となし、暑熱厳しい地域をも併せて、近代科学の運用により、充分に開発して食料の増産に努めるならば、この大陸だけで、よく数百億の人口を支えることが可能となることは確実である。

つぎに目を転じて、地球上の既耕地の現状に一瞥を与えると、今や文化の進展に伴い各国人口の都市集中が日と共に強まりつつある。必然の結果として既耕地の良田沃土が手不足のために漸次廃耕放置されつつある部分が年々増加しつつある。現にわれわれ日本国の実状がその一例であつて、領土が頗る狭い日本の首府東京其他諸都市ならびに其近郊に於てすら家も建てず耕作もせず、徒らに草茫々たるに委せてある土地が頗る多い。しかしこれは独り日本だけでなく文明の進んだ国々が皆同様である。かくして全世界を通じ商工業が日と共に進歩発展するに伴い人口の都市集中が日と共に加わり年と共に高まり、そして廃耕地域の面積はますます増加しつつある。同時にまた農業に於ては一方政府の耕地面積縮小政策により他方農家の著しい兼業農家化に起因する農業の粗放化並に山林化により、食料生産額が漸次減少の方向へと進みつつある。しかし世界各国がもしかかる態度を改ため、一方前述の処女未墾地を開墾すると同時に他方これら粗放化既耕農地の再耕集約化を併行実施するならば、それだけで全世界の農地面積は殆んど倍加に近い二千六百七十万K²m²となり、これを科学的に精耕すればその生産物の人口支持力は二百億以上となる。更に現在の牧場、森林、砂漠および寒地等の一部を開墾すれば、耕地面積がますます拡大することは論を俟たぬ。先ず牧場について考察すると、全世界牧場の既存面積は約一三四〇万K²m²であるが、その集約経営により単位面積の生産量

が年々増加すると共に、他方漁業の著しい進展に伴い、魚類蛋白質の供給量が漸次増加することにより牧場面積をある程度縮小することがむしろ有利となりつつある。そこで所要牧場面積は現存牧場面積の約四分の三で事足り、残る四分の一、すなわち三四〇万 Km^2 は農地化することができる。つぎに陸地の約30%を占める森林の大部分は、現在粗放経営下にあるか、あるいは殆ど放任されている部分が決して少くない。加うるに一方石炭、石油等の天産燃料の産額増加に伴い薪炭の需用激減するとともに他方建築資材が、鉄、プレハブ其他の珉鉦、繊維等代用品に依存する量がこれまた日と共に増加しつつあり、従って建築用木材の需用量また漸次減少しつつある。このように薪炭材、建築材の木材代用品増加により、森林面積また約30%、一二〇〇万 Km^2 を農地化することは可能となるに至った。つぎに地球陸地の1/3を越ゆる大面積を占める砂漠に至っては殆んどその全部が全く不毛の地と一般から考えられているけれども、しかし、この道の専門科学者たちは、それとは反対に砂漠の大部分は現代科学の運用により必ず良好な農地に化することが可能であることを確認している。これら専門家の研究によると砂漠の地下深所には想像も及ばぬ程巨大な淡水湖が存在する。もし人類が一致協力してその利用法の研究を重ね、核分裂および太陽光熱の利用等により、この地下水を汲上げ灌漑すれば、砂漠の大部分を良田楽土と化することが必ず出来る。

つぎに陸地総面積の約五分の一を占める北寒地帯は、営農全然不可能と従来考えられていたけれども、ロシア専門家の長期に亘る不撓不屈の熱心な研究とその実地運用との結果、今や極寒に耐え得る農作物が漸次育成され、同時に極寒地住宅の建設技術および其処での生活方法も漸次工夫され、今や寒帯は温帯より何等の輸入品なくとも、寒帯産資料だけで、よく自給自足し得る日の到来が遠くないことを示している。のみならず、将来の研究とその運用努力の推進に伴い、寒帯新文明の創造発達への希望すら炎上しつつある。これは決して独り北欧の寒地だけに局限されたこ

開墾により拡大可能な耕地面積一覧表

⑤

A種別	B 全面積	C 開墾後の耕地面積	D 人口支持力 (1km ² 当り 1,400人として)	備考
	万km ²	万km ²	万	
既耕地	1,400	1,400	19,600,00	現状のまま
可耕未墾地	1,240	1,240	17,360,00	全部開墾
牧場	1,340	340	4,760,00	約25%開墾
森林	4,100	1,200	16,800,00	約29%開墾
砂漠, 寒地其他	5,490	5,120	71,680,00	約93%開墾
計	13,600	9,330	1,302,000,00	B : C = 13,600 : 9,330 B : C = 100 : 68.6 陸地総面積の69%が農耕地

世界人口の激増と地球の全面的開発 II 日本の責務 (西野入)

とではなく、広く西北利亚、加奈太、アラスカ等の極北地にまでその光明を輝かしつつあり、斯道専門家の研究と一般住民の撓まぬ勤労とにより寒地の食糧増産、人口支持力強化は日とともに進み年とともにますます高まりつつある。そこで上述各種地域の農地化可能面積を表記すると大体上表のようになり、その総計なんと九千三百三十万K²に達し、陸地面積の約69%を占める。

さてこれらの全耕地に対し最新の科学技術を賢明に利用耕作すれば、その生産食料は優に六百五十余億の人口を支持してなお余りある。更に一步を進めてソ連国が長期間に亘り、一流専門家に托して広範囲に亘り慎重に科学的実験を重ねた上、発見した新農業技術をこの拡張後の全世界農地に運用すれば、その生産額は更に倍加して千三百余億の人口を充分に支持することが可能となる。

また人体からの排出物および土壤、水、空気、等の中に存在する窒素、燐酸、加里、炭酸ガス其他の有機無機諸要素を、太陽の光利用によって、農作物の肥料に転換使用すれば、その収穫量は七倍以上に増加する。従つて前記農地の生産食糧は九千百億 (1,300億×7=9,100億) 余の大人人口をよく養うことが可能となる。

更に陸地の二倍以上の大面積を占める海洋水域の食糧供給力は、これまた驚くほど強大である。現在利用されている海産食糧は、僅かに水面および水面下二百メートル以内に存在するものが大部分である。しかも僅かにその一部分だけが利用されているに過ぎない。それ故に、もしこの水面下数百メートル以内に集積する豊富な食料を一層多量に獲得利用すると共に、更に深海すなわち、現在殆んど全く鎖された秘密の宝庫を開発利用し、同時に、他方全世界の近海に於て大規模の養魚を実施すれば、これらすべてによって海洋が人類に齎らす食糧の総量は、優に、陸地の総生産額九千百億人分以上となることは明らかである。しかし海洋の生産量を控え目に陸地のそれと同量となし、これらの両者を合計すると、全地球海陸両面積の人口支持力合計は少くとも一兆八千二百億人となり、国連人口部の二一五〇年推計人口一兆七千八百二十余万を若干超過する事となる。更にこれら全世界農耕地の耕作方法の進歩改善を促進しその全地域に対し、太陽エネルギーを一層賢明に運用して、その耕地単位面積生産量を著しく増大させることにより、更によく幾兆億の多量人口に対して充分の食糧を豊かに供給し得ることは斯道専門家達が斉しく明言している処である。

以上は主として農地を拡張し耕作法を改善することによって食物の生産量を増加しこれによって人口支持力を高め得る方法の概略であるが、同時に肝要なことは、その質の改善によって、同量の食糧が、より高度の栄養価を持つような方法を講じ、これによって地球の人口支持力を更に増大することである。結局これは農産食糧の構成分子を、人体の栄養力を高めるように科学的人為的に漸次変化させることであり、主として生物学、肥料学其他有機無機化学の慎重な総合研究とその賢明な運用とにより斯道専門家が着々其歩を進めつつあるところであって、今や食糧増産の道は独り動植物が供する自然力利用だけに便らず更に進んで人間の頭脳の進化とその研究と努力とをこれに結合するこ

とにより、その前途を殆んど無限に近いほど進展させ得る可能性を暗示している。更に無限に近い太陽エネルギーの巧妙な運用をこれと結合すれば、食糧供給増加の可能性は人知の無限進歩と共にいよいよますます無限に近いものとなりつつある。もちろん、これは自然にそうなるのでは決してない。それは地上に居住する人間の長期に亘る撓まぬ熱心な研究努力と其成果の実地運用に捧げる不撓不屈の奮闘努力との結晶であることは特に銘記せねばならぬところである。

四 世界人口食糧政策

第二項の説述により地球上の現存人口四十億は、将来健全文化の進展に伴う自然増加に委すならば、二百年後に二兆に到達することは到底あり得ないであろうことは明らかである。しかるに食糧は、全人類が一致協力して海陸の資源開発運用に充分の努力を惜しまぬならば、人口が如何に増加しようとも、それに必要な分量を充分に生産し得ることは前記第三項の説明により極めて明白である。ただし、この積極路は不断の研究と奮闘努力を要し其実行には相当の困難ある事は言うまでもない。しかし前段に述べた避妊による産児制限の消極路は、克己奮闘の必要なく、其実行頗る安易なるが故に、多くの人々は、この道を選び勝ちである。殊に近時洋の東西を通じて人口爆発恐怖論が喧しく叫ばれ、その対策として口経避妊薬またはコンドーム其他の技工的避妊具を弄して家族計画と称する如何にも科学的に響くが其内容は全く反自然法的な避妊による産児制限を実行し、以って人口増加をゼロに保とうとする、いわゆる静止人口論なるものが頻りに提唱されるに至ったのも畢竟これがためである。しかしこれは一大誤謬であり、われわれは絶対に其迷路に陥らぬよう注意に注意が必要である。

この論者が恐怖するいわゆる人口の過剰爆発は、生物としての人間がその進化途上当然通過すべき一過程であつて大いに歓迎すべき健全な自然現象であり、その対策さえ宜しきを得れば何等憂うべきことではなく、むしろ社会進歩、人類発展の前衛として大いに歓迎すべきことである。ただここに極めて肝要なことは、この生物的自然現象に関する根本原理を篤と理解し、その対策を誤らぬことこれである。では、その根本原理とは何か？ その要諦はつぎの通りである。（第一原理）健全なる人口増加を反自然的な方法によつて抑制せず家庭生活を正常に営み得るまで結婚せず、其間禁欲して純潔を堅持しつつ簡素質実剛健な生活を実践し、進んで刻苦精励その必要とする物資の増産にこれ努める積極道を歩む国は興り、民は栄える。（第二原理）反自然法的手段すなわち避妊によつて人口の増加を不法に抑制して安易の途を辿ろうとする消極道を選ぶ国は不可避免的に衰退し、其民は必然的に滅亡する。

今静かに人類の進化過程に一瞥を与えると、その無知蒙昧の原始時代から、高度文化に輝く現代に至るまで、その長期間を一貫して、程度の差こそあれ「人口過剰」すなわち、人口は殖えるが食糧はこれに伴つて増産せず不足を生じ、そこにいわゆるマルサスの人口原理なるものが何時か何処かで、何かの形態に於て常に発生しつつあることに気がつく。そしてこれに直面した国民の対策を大観すると、結局前述の二大原則すなわち（一）退いて人口増加を不自然の方法で抑え、更にこれを減らそうとする消極策と、（二）一定の年令まで禁欲により純潔を堅持すると共に進んで食糧の増産、獲得にこれ励む積極策との二種に総括することができる。そして長年に亘つてこれを大観すると、第一の消極路は確かに安易にして辿り易いが故に多くの人々はこの道を選んだ。しかしこの安易な消極道を選んだ邦家は漸次衰退し、ついに亡びたに對し、第二の積極路は多くの場合困難を伴った。しかしそれを厭わずこの難路を濶歩した勇敢な民族は、その途上種々様々の苦難に直面したけれども、よくこれらを克服しつつ奮闘努力前進また前進、漸次繁

栄して、ついに地を継ぐに至った。何故であろうか？ 遠く古代ギリシアがあの中地中海に突出するバルカン半島に建国の偉業を見事に達成した紀元前二千年の太古から、アジアの日東国日本が第二次世界大戦に敗れて、無条件に降服し、四つの小島に一億以上の人口が密集、跼蹐苦闘を余儀なくされつつある廿世紀の現代に至るまでの世界史を通観すると、一国人口政策の消極、積極と其興亡とに関する前述原理は極めて明々白々であって一点の疑う余地もない。

そして、その消極的人口抑制政策中最も広く行使された方法は、何かの形式による避妊である。換言すれば、性交に際し、原始人の粗野な方法は別とし、文化人の多くは薬品または器具其他の手段によって、故意に妊娠を回避し、徒らに性交が齎らす快感だけを貪るの愚を演じたのである。これはもちろん、人間の純潔な本能に背く非良心的行為であって、一旦この魔道に踏み迷った民族は、心身共に漸次弱化し、ついに滅亡するに至ったことは、幾多の史実が最も雄弁にこれを立証して余りある。古代ギリシア、ローマの滅亡もその主因はここにあった。

然らば何故に避妊はこのように個人を弱め国家を亡ぼすのであろうか？ それは「自然法を犯す者は自然に亡びる」という万古不易の鉄則、神法に起因するのである。われわれ個人の生命は有限であり、如何に長寿者といえども、三百歳は生きず死亡する。そこで、各個人は死すとも、その氏族は死滅せずに永存するため、天は各個人の一定の年令期間頗る強烈な性欲を自然に發揮させて性交を促すのである。従って、この性欲は如何に強烈であろうともそれは結局妊娠出産への一手段一機能に過ぎず、それ自身決して目的ではない。然るに避妊は、性交本来の目的たる妊娠を故意に回避し、それへの刺激誘導手段に過ぎぬ快感だけを徒らに貪る尾籠極まる卑劣、汚行、大罪悪であり、性に関し天が定めた神聖な自然法を無慙に蹂躪する大罪であり、その犯者は、先ず自己の良心を曇化するばかりでなく、更に精神を弱化し、その上に肉体をもまた漸次病弱に陥れ、剩えその悪質が子孫に遺伝し、やがて民族自滅の運命に陥る

は理の当然であり、自業自得、真に不可避的である。罪の報いはただ死あるのみである。古代のエジプト、バビロン、ギリシア、ローマ等の諸国滅亡の根本深因は真に避妊であつたことを忘れてはならぬ。由来人間は一方に於ては、低い動物性に生きる一種の生物であるが、他方に於ては、いと高い精神的靈性に生き抜き、その叡知、良心、自由意志によつて低い動物性をよく統御して純潔高貴な生涯を生き抜かねば、決して真の満足と幸福な生存とを勝ち取り得ない真に尊い本性を内在する靈長的存在である。生れながらに、かかる高低相反の両性を具備するわれわれ人間はその思春期に到達すると、先ずその低い動物的固有性により、頗る強烈な性欲が発動する。もちろん、これは後継者創造のために天が備えた神聖な本能であつて、万物の靈長たる人間なる者はその特性たる理性と良心とにより、自然に従う動物性を慎重に自制しつつ、靈性によつてこれを正しく統御行使することを忘れてはならぬ。性欲の自制克己、正行、純潔の嚴守こそは、ただに人口問題の正しい解決に必須であるばかりでなく、同時にまた子孫の繁榮、堅実な文明の昇華に対し絶対に必要不可欠である。もし誤つて性欲の自制を等閑に付し、これを乱用すれば、単に人間の尊嚴を汚し、その精神を墮落させるばかりでなく、これに伴う肉体的支障病弱およびエネルギーの浪費また高度に達し、必然の結果として体力を著しく弱め、寿命を短縮し死期を早めることは明瞭不可避である。けだし、性交はその都度男女両者の全身細胞より多量の精力を消耗するが故に、それだけ健康と寿命とにマイナスの影響を及ぼすことは当然の帰結である。この事実はある種昆虫は交尾直後其雄虫は即死し、雌虫は産卵後間も無く死滅する事実に徴するも極めて明瞭である。性行為によるエネルギー消耗が如何に大であり、それが個人の活力と寿命とに如何に大きな悪影響を及ぼすかは真に意表の外である。また古今東西の史実を静観すると、個人的にもはたまた民族的にも、早婚者からは真に崇高偉大な人物も文化も生れておらない。換言すれば性交は寿命と文化進展との敵である。さりなが

ら、氏族生命の維持保存上、人生の一定期間この犠牲を耐え忍ぶことは、絶対に必要である。さりながら後継者出生というこの神聖不可欠な目的達成のために天が備えたかくも貴重な性交を、徒らに享樂の具に供し、愚劣にも性欲の奴隸となって避妊する迷者は、心身共に漸次病弱退化し、ついに早期死滅の深淵に沈淪するに至ることは、これ全く自業自得、因果応報の原理による不可避当然の帰結である。かかる理由により、家族計画と称して避妊により実行する静止人口政策は如何に有害無益の愚挙、自殺行為であるかは、疑う余地が毛頭存在しない。

それ故に、もし人口過剰、物資不足の状態に直面した場合には、須く禁欲、晩婚、簡素生活、奮闘努力、以って自己に克ち世に勝ち、自然法に背く避妊の大罪には絶対に陥らず、天与の子供は皆大切に愛育することこそ理性と良心とを具備する人間の歩むべき正道であつてこの正道を濶歩する者は必ず健全に進歩発達してその人口はますます増加し、同時に文化は着々と発展し、富も知徳も、いや増し加わり、精力うちに満ちてただに一家を繁榮に導くばかりでなく、その余力は外に溢れ自然に世界を開発しこれを支配するようになることは人口自然の原理であつて、古今東西に亘り永久不変である。そのよき実例は十五世紀から二十世紀に亘る五百年間の白色人種と有色人種間の人口増加と支配面積との変化にこれを見ることができる。これを一目瞭然たらしめるためにその変化を二期に区分し、白色人種が狭い欧州にだけ立て籠っていた十五世紀を第一期の中心とし、白色人種の最盛期すなわち第二次世界大戦勃発の一九三九年を含む二十世紀を第二期の中心とし、この二期に於ける有色人種と白色人種との「人口と支配面積」とを對比すると左表の通り大変動を示す。

すなわち第一期当初の一四〇〇年に於ける白色人種の総数は僅かに五千四百万であつて世界総人口三億七千三百万の一四・五％に過ぎない。そしてその支配領土面積は欧州の小天地千五十万K²m²だけに留まり、陸地総面積一億三千

白色人種と有色人種の人口と支配領土面積変化一覽表

⑥

種別 年次	白 色 人				有 色 人				計			
	人 口		支配面積		人 口		支配面積		人 口		支配面積	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
第一期中心 1 4 0 0	5,400 万	14.5	1,050 万km ²	7.7	31,900 万	85.5	12,530 万km ²	92.3	37,300 万	100.0	13,580 万km ²	100.0
第二期中心 1 9 3 9	85,000	40.0	11,800	87.0	130,000	60.0	1,770	13.0	215,005	100.0	13,580	100.0

五百八十万K²mの僅かに七・七％に過ぎず、その国際的地位は実に微弱である。然るに当時の有色人種の人口は白色人種の約六倍三億一千九百万、世界総人口の八五・五％に及び、その支配面積は欧州以外の全世界約一億二千五百三十万K²mすなわち陸地総面積の九二・三％に及んでいる。すなわち第一期に於て有色人種は白色人種に比し、人口は六倍、領土はなんと十二倍を保有し、人口、領土何れの立場からするも有色人種は断然白色人種のはるか上位に位したのである。しかし、当時の世界は人口密度低く、また交通機関も未発達のため、どちらも国外進出の必要も意図もなく、ただ国内に安居を持続したのである。

しかし狭い欧州の小天地に跼蹐した白色人種はやがてその人口増加力頗る旺盛となり過剰人口爆発の圧力日と共に激甚となり、その解決に至大の苦悩を持つに至った。しかし自然法を尊重する崇高偉大なキリスト教を信奉する彼等

は、絶対に避妊の罪に陥らず、「窮すれば通ず」、「必要は發明之母である」の原理により、まず母国未墾地の開拓にこれ努めた。更に進んでコロシブスのアメリカ発見に大きな刺戟と希望を得て、盛んに海外移住を断行し、これに依つてひとり本国の過剰人口問題を解決したばかりでなく、人口稀薄な移住地に於て各家庭は盛んに出産し、十人、二十人の小供を有つ家庭が決して少くなかった。その一例をベンジャミンフランクリンにとると彼は十六人兄弟中の十五番目の男児であつた。その出生児に高く強いキリスト教の信仰と広くかつ強い実用的な教育とを与えつつ、一方祖国欧州に於ては高い文化の推進に努めると俱に他方移住地に於ては、ますます未開發の天地に進出して新領土を拡大して、第二期の末葉すなわち第二次世界大戰勃発の一九三九年頃までに、白色人種は狭い欧州を抜け出して広い全世界の五大州全域に其勢力を拡大して有色人種の上位を占め、今や白人優位の世界を形成するに至つた。先ずその人口方面を一瞥すると、白色人種は、第一期の五千四百万から、その約十六倍に増加して八億五千万となり、世界総人口に対する比率は、第一期の一四・五から一躍四〇・〇%と三倍近く上昇した。そしてその支配面積は、第一期の千五十万K²mから、一億一千八百万K²mと、十一倍以上の一大増加を示し、世界総面積に対する比率は、第一期の七・七%から第二期の八九・〇%と、これまた十一倍以上に増進した。これに反し、有色人種は、はるか後方に瞠若たるの感がある。すなわち、その人口は、第一期の三億一千九百万から、第二期の十三億と僅かに四倍程度の増加に過ぎず、従つて世界総人口に対して占めるその比率は、第一期の八五・五%から第二期の六〇・〇%へと白色人種の飛躍的上昇とは正反対に三〇・〇%以上後退している。更にその支配面積に至つては、これまた第一期の一億二千五百三十万K²mから、第二期の一千七百七十万K²mへと約七分の一以下に激減し、世界総面積に対する比率は、第一期の九二・三%から第二期の一三・〇%へと一大転落を余儀なくされてしまった。

白色人種が、第一期から第二期への五百年間に、かくも驚くべき一大発展を遂げたのはそもそも如何なる原因によるのであろうか？ それは第一に当時欧州に於ける彼等白色人種の人口増加が非常に旺盛となり、その物凄い過剰人口の圧力に彼等は骨の髄まで悩み抜いた事、第二にその解決策として自然法に反する避妊による消極的産児制限を絶対に採らず、敬虔な信仰に立脚して簡素、質実剛健な生活に徹し、進んで積極的国外移住進出を断行したことである。

要するに、文化は性欲の昇華 (Civilization is sublimation of sexual instinct.) なるが故に、人類が健全幸福な文化生活を営むためには、人口の多寡、物資の過不足如何に論なく性欲の自制克己と研学の推進並に簡素生活、奮闘努力とが絶対に必要である。特に人口過剰、食糧不足が絶叫される現代に於ては、殊更に其必要が大である。依つてわれわれの婚期を大体男子は三十歳、女子は二十五歳となし、それまでは克己禁欲して童貞を絶対に穢さず、性欲を昇華して勤勉努力、家庭生活への物的並に知的靈的準備を充分に整えた上結婚する。そして一旦家庭生活に入った後は避妊其他の反自然法的悪行為を絶対に犯さず、天より授かる子供を大切に育てる。同時に科学の奥義研鑽に全力を傾注し、その齎らす原理を賢明に運用して、全地球の宝庫を着々開発し、食糧の増産にこれ努めて怠らない。そうすると天はわれわれ人類のかかる大奮闘を大いに嘉し、その報いとして将来地球上の人口が如何に増加しようともその必要とする食糧増産の道を、われわれの努力に応じて必ず開いてくれることは、過去の史実が最も雄弁にこれを立証している。

かかる理由により、この際世界人類が挙って採るべき人口食糧政策は、第一の安易ではあるが反自然法的な避妊による産児制限、静止人口の消極的自殺路を絶対に排し、第二の多難ではあるが健全にして結局人類を幸福に導く地球開発食糧増産の積極路の濶歩でなければならぬ。

反対論者は言うであろう。「そのような積極策は、ますます人口を過剰ならしめ、全人類を食糧不足、飢餓の谷に追い込む暴挙である」と、しかし左様な心配は無用である。既に前段第二項に詳述したように、地球の現存人口四十億はどんなに増加しようとも二百年後に二兆には到達しないであろう。しかるに食料は全人類が一致協力して海陸の資源開発運用に努力すれば、人口が如何に増加しようとも、それに必要なだけの分量を充分に生産し得ることは前段第三項の説明により極めて明確である。依って人類の進歩、文化向上の根本要因である人口の過剰爆発は大いにこれを歓迎し、自殺的反自然的の避妊による静止人口論の誘惑に絶対に陥らず四十億総人口が一致協力して、全世界海陸秘蔵未開発資源の開拓に突進し、以って増加する人類が必要とする食料其他の必要物資を充分に生産し、その賢明な運用によって愛と正義に充ち溢れる高級な新文化に生き抜く新世界建設に邁進することこそが、われわれ全人類に對し天から課せられた新使命であることを全人類の一人一人が此際篤と理解しその実現に一致協力せねばならぬ。この大使命達成の前途には、もちろん幾多の困難が山積している。その第一は地球上の現存人口と国土との分布が各国の必要と供給に一致して居らぬことである。換言すれば一方広大な未開発地域を所有するが人口密度は稀薄な国々は差当りこれを開發する必要が全然存在せぬに對し他方に於ては人口過剰食糧不足が甚だしきにも關らず、これを生産するに必要な未開墾地域が頗る少ない、否、殆んど皆無に近い国々が並存することである。旧式の國家至上主義からすれば、A国は自国にとり何等開發の必要がない大面積の国土が空しく放置されて居るにも關らず、これを割いて、その必要に迫られている無所有国Bに融通せねばならぬ義務はもちろん毛頭存在しない。またB国にはA国に對してこれを要求する権利が毫も存在せぬ事も言を俟たぬ。しかし背に腹は換えられぬので窮極に於てBはAに對して何等かの口実により戦を宣し非常手段に訴えてその解決を計ったのが從來の史実である。しかし、今や人類の國際生活は

一大飛躍を遂げ世界は一つ、全人類は一大家族兄弟姉妹となり、言語風俗習慣文化の差異如何に論なく、愛情と正義とに立脚して一致団結、全人類一体となり、有無相通じ相互協力に依って活き抜かねばならぬ新時代となって来た。須く従来の狭い国家民族主義を棄て世界一体全人類同胞主義に進化展開せぬ限り、真の平和と幸福との実現保証は不可能である。世界の人口、食料問題のかかる積極的解決こそ、世界同胞主義実現促進への一大好機である。国際政治の立場からは取り敢えず現存の国連を賢明に運用すると共に進んで世界国家または世界連邦の組織運営を強化するとともに各国はこの人類同胞精神の涵養にこれ努め、一方に於て各国の各家庭及び小、中、高、大学の教育に於て、この人類同胞精神育成に充全の努力を積むと共に他方その国際並に国内政治に於て、これが実現に最善を尽し、以って急がず撓まず漸次其実現に奮闘努力することが何よりも肝要である。もちろん其途上には幾多の困難が山積することゝを覚悟せねばならぬ。しかし、われわれが誠心誠意奮闘努力すれば天は必ずわれわれを助けて、この人口食糧問題を正しく解決すると共に新世界主義、人類同胞主義建設のこの一大偉業を美事に達成させ、不和闘争の絶え間ないこの地球を変じて一大樂園と化させることは確實にして何等疑う余地がない。不動の確信と不撓の健闘を以って其実現に全力を傾注することこそ、全人類に課せられた何よりも大切な一大責務である。

Where there is a will, there is a way.

敬愛する地上四十億のわが同胞諸兄姉がこの理想実現に向って一致団結直往邁進されることを私は衷心から切望して止まないのである。

五 日本の責務（日本の人口・食糧政策）

さて上述の全人類的理想実現に対して日本国日本人の負うべき責務、そしてその実現に対して採るべき人口食糧政策は、どうあるべきか？ それは一方日本の現実在即すると同時に他方前述の全世界人類同胞主義理想の実現に貢献するものでなければならぬ。では先ず日本の食糧、人口の現実はどうであるか？

1 日本の人口・食糧の現状

そこで日本の現実直視第一歩として世界地図を開き、日本国土の位置、面積を検討する。あの渺茫たる太平洋がアジア大陸に迫ろうとする所、その大洋と日本海との中間に北は北緯45度東経145度付近の北海道から、南は北緯31度東経131度付近の九州に至るまで其間に点在する多数の小島から成る島国、それが愛する祖国日本国土の位置である。その総面積僅かに三七万K²m、地球陸地面積一億三千五百万K²mの僅かに〇・二五%すなわち三九五分の一に過ぎない、真に狭ま苦しい国土である。しかし幸にして全地域が文明の生長発達に最適の温帯に位し、氣候温暖、雨量また豊かであつて農業には最適地である。ただし急峻山岳地帯多くして山紫水明秀峰溪川に富み、高遠な思想涵養には頗る優秀であるけれども経済的見地からすれば、平地に乏しく、農地は狭く耕地の総面積約六百万Haは国土の総面積三十七万K²mの約一六%に過ぎない。しかもその狭い農地が都市膨脹に伴い、商工業の蚕食する処となつて漸次減少しつつあり、一九七三年現在約六%減少して五六万Haとなるに至つた。従つて国内農産物だけによつて全国民を養ふことは絶対不可能となり、今や大豆、大麦、小麦、果実、肉類、其他諸種の食料を輸入に仰ぐこと年と共に増加し、

現在全国民食料の約半分強を海外からの輸入に頼らねばならぬ苦境に追い込まれている。

加うるに天然資源また頗る貧弱であつて、石油を始め、鉄鉱石、アルミニウム、ニッケル、其他工業必需品原料の殆んど全部を輸入に仰がねばならぬ実状である。其結果一九六六年以来日本国は自由世界中の資源輸入国の第一位を占めるに至っている。（注六）要するに日本国土は気候的景勝的には充分恵まれているけれども経済的には他の諸国に比し、極めて貧弱であり自給自足は現在のところ絶対不可能となるに至つたのである。

つぎにその人口状態はどうか？ その概況を知るためまず最近五〇年間の日本人口推移の大勢に一瞥を与えると、次表の通りである。

日本現住人口一覽表

年 次	人 口 千人	密 度 %	
1920 (大正 9)	55,963	146.6	含沖繩
1925 (" 14)	59,737	156.5	"
1930 (昭和 5)	64,450	168.6	"
1935 (" 10)	69,254	181.0	"
1940 (" 15)	71,933	188.0	"
1945 (" 20)	72,147	196.0	除沖繩
1947 (" 22)	78,101	212.0	"
1950 (" 25)	83,200	223.9	"
1955 (" 30)	89,276	241.5	"
1960 (" 35)	93,419	252.7	"
1965 (" 40)	98,275	265.8	"
1970 (" 45)	103,720	280.3	"
1971 (" 46)	105,006	283.7	"
1972 (" 47)	107,332	288.1	含沖繩

注⑦ 国勢図会 1974年版) p. 57

すなわち日本の総人口は一九二〇年の約六千万から一九七二年の約一億八百万へと五二年間に約四千八百万、年平均九十二万余、約一・五%の増加を示している。その根底となる人口動態を見ると一九二五年から一九五〇年までは千人に対し、出生率三五―二五内外、死亡率二〇―一〇内外、自然増加率一五内外であつたが、一九五五年には俄然急転落下して、出生率一六・七九%、死亡率七・六七%、自然増加率九・一二%となるに至つた。さらに一九五七年には出生率

年次別標準化日本出生率，死亡率，自然増加率

年 次	出生率 %	死亡率 %	自然増加率 %
1923 (大正12)	34.4	23.2	11.2
1925 (" 14)	35.27	20.24	15.03
1930 (昭和5)	32.35	18.17	14.18
1937 (" 12)	29.77	17.35	12.42
1940 (" 15)	27.74	16.80	10.94
1947 (" 22)	30.69	15.32	15.37
1948 (" 23)	優生保護法制定		
1950 (" 25)	25.33	10.97	14.36
1955 (" 30)	16.79	7.67	9.12
1956 (" 31)	15.83	7.86	7.97
1957 (" 32)	14.61	8.01	6.60
1958 (" 33)	15.19	7.14	8.05
1959 (" 34)	14.82	7.02	7.80
1960 (" 35)	14.62	6.99	7.63
1961 (" 36)	14.24	6.71	7.35
1962 (" 37)	14.26	6.64	7.62
1963 (" 38)	14.45	6.10	8.35
1964 (" 39)	14.80	5.91	8.89
1965 (" 40)	15.65	5.97	9.68
1966 (" 41)	11.73	5.55	6.18
1967 (" 42)	16.22	5.42	10.80

注⑧ 厚生省人口問題研究所：最近のおもな人口統計
No. 20 (昭和45年1月) p. 8

一四・六一％、死亡率八・〇一％、自然増加率僅かに六・六〇％に急低下し、其後はある程度の一上一下を繰返しつつ、世界に前例を見ない迅速さを以って日本人口増加率は急降下を示すに至った。何故か？ その最大原因は一九四八年ある産婦人科医出身の一参議院議員の提案により制定された「優生保護法」と称する新法によって、日本国が堕胎を公認し、避妊を全国的に指導奨励しつつあるがために、堕胎が年々二百万以上繰返されるとともに避妊が既婚未婚両者を通して年と共に急増し今や三千万家庭の八〇％と婚期にある未婚婦人の約五〇〇万の半数以上とが、年中この自然法を蹂躪する卑劣極まる避妊の大罪を犯し続けている結果である。この悪法のために一夫婦一生涯の出生数は二内外

に低下して世代更新率は一を上下徘徊する不安状態に陥っている。しかしこの悪法制定前の出生率は二五%以上の高率であつたためと終戦後の出生者が今や結婚、出産期に入つたことと相俟つて現在出産年令期にある婦人の数が比較的多数であるという二つの原因により、全体の出生率は若干上昇し一九七四年には約一三・〇%となつたけれども、一九七四年九月末現在日本人口総数は僅かに一億一千万を数うるに過ぎず、日本工業化の前進に伴い必要増大する労働力殊に若年労働者の供給甚しく不足し、そのため中小企業の倒産年と共に増加しつつある。加うるに堕胎、避妊の全国的蔓延に伴い、国民精神また日と共にますます墮落し、性道德甚だしく乱れ、一方未婚女性の処女性喪失激増と共に他方私通姦通、乱暴強姦また日と共に増加して社会不安いよいよ拡大しつつある。このようにして精神的に、はたまた経済的に、日本に大害を及ぼしつつあるこの恐ろしい憎むべき大罪、堕胎と避妊とは日本を刻一刻と滅亡の深淵に追い込みつつある。しかし、同胞の多くは残念ながらかかる滅びの道を辿りつつある自己の運命を自覺せず、ただ眼前にちらつく浅薄な唯物文明を享樂しつつ笑い興じてまた余念なしである。これをこのままに放任しておくならば、日本民族は必ず自滅する。一刻も早くこれらの人々の目をさまして、その危地から同胞を救出することは急務中の最大急務である。もし優生保護法による堕胎の公認避妊の指導奨励さえ無かつたならば、日本は現在民族生命第二次壮年期にあつて盛んに増加発展する段階に位する筈であるが、この悪法のために早くも第三次老年期に突入しつつある。従つてこのまま進めばその将来増加は次表のように頗る弱小化せずにはおかぬ。

すなわち一九七五年には約一億一千万の人口が五〇年後の二〇二五年には、約一億四千万に達し当世紀間に約三千万人大略二七%増加するに過ぎず。それ以後は横遣い即ち停止人口となり、さらにある年数後には人口逡減の時期が到来すると予想されている。

日本人口増加の将来

年次	人 口			
	計	0～14歳	15～59歳	60歳以上
1975	109,925 ^千	26,347 ^千	70,665 ^千	12,926 ^千
1980	115,972	27,914	73,413	14,646
1985	120,798	28,211	75,827	16,760
1990	124,744	27,519	77,605	16,290
1995	128,344	26,952	78,848	22,544
2000	131,838	27,541	79,371	24,925
2005	134,960	28,647	76,058	27,255
2010	137,225	29,346	77,472	30,408
2015	138,614	29,279	77,979	31,356
2020	139,605	28,971	79,966	30,668
2025	140,619	29,128	81,559	29,932

注⑨ 日本統計年鑑（昭和47年版 10～11頁）

2 日本の採るべき人口・食糧政策

さて、上述の如き地球と日本との人口・食糧状況下にて、日本が採るべき人口・食糧政策はそもそも如何にあるべきか？ その要点だけを摘記するとつぎの通りである。

(一) 堕胎、避妊が如何に有害であるかを全国民が篤と理解し、堕胎を公認し、避妊を指導奨励するあの「優生保護法」を即時撤廃して、堕胎、避妊を日本全土から一掃する。

(二) 避妊による静止人口政策を絶対排除する。一九七四年夏季、東京の日本人口会議およびブカレストの世界人口會議に於て、自然法に背反する避妊による静止人口政策が提唱されたことは、日本民族並に全人類の健全なる進歩発展のため、真に遺憾極まりない事項である。われわれは決してこれらに迷わされることなく、断乎として避妊と絶縁し、誤った消極的自殺的政策を排除し、須く食糧増産に依拠する積極的人口政策の範を世界に示さねばならぬ。

(三) 結婚年令は、各人の事情により不同なるべきは言を俟たぬ。ただ大体の標準を示せば現代の日本に於ては、男子は三十歳前後、女子は二十五歳前後を適令と思考する。

「文明は性欲の昇華である」高度の文化を享受すると共に健全なる子孫を出産養育するためには早婚すべきではない。家庭生活に必要な精神的並に物質的準備が相当に整うまでは男女何れも克己禁欲、童貞の純潔を堅持しつつ心身の修養と必要経費の貯蓄とに努め、準備整頓を俟って結婚する。

(四) 結婚後は墮胎、避妊は如何なる形態に於ても絶対に行わず、天与の子供全部を神さまからの御依托者として大切に養育する。万一何か正当の理由により出産を抑止する必要がある場合には克己禁欲、以って人間の尊厳を絶対に穢さぬこと。

(五) 国内未墾地を開墾し、廃耕地を復耕する。日本の耕地面積五九三万H^aは国土総面積三七万K^m²の僅かに一六％に過ぎず、広い山林原野の中には、まだまだ開拓の余地が相当に存在する。また工業の進展に伴い農民がその方面に引きつけられつつあるがために兼業農家年と共に増加し、現在全農家の八六％がその囚となっている。これらの兼業農家は手が廻りかね、やむなく先ず粗放農業に墮し、ついで廃耕に進み農地変じて原野山林と化しつつあるものが決して少くない。増加人口によりこれらの開墾再耕に努める。

(六) 農学の科学的研究を深め、新作物、新品種の発見、創造及び施肥、耕作法の改善に努め、前項による耕地面積拡大と相俟って、食糧増産に努め、特に大豆、麦類、家畜飼料、食肉、其他の輸入食料全部の自給自足を完成する。

(七) 全国農業を大農組織に改造し、機械力を利用して、少数專業農家が其経営に当り、現存兼業農家は全部解消して一部は專業農家となり、他は農業以外の職業に專業する。余剰人口は海外に移住する。

(八) 全世界の広大な未開發地所有国と協議の上資源開發に融資すると共に帰化永住の決心を以って優秀人物を先頭に立て多数国民が全世界の各地に永住の覚悟を以って盛んに移住し自己と子孫の生活安定を計ると共に移住国の福利増進に貢献し、移住国国民と相提携して、未墾地を開發し該国の進歩開發に貢献する。文化の著しき進歩は今や世界を狭め、最早従来の国家至上主義から脱皮して國際主義、人類同胞主義に突入すべき時期に到達していることは既述の通りである。大未墾地を所有する国々にとっては其決心を固めることは決して容易なことではないだろうけれども、持たぬ国日本は焦らず撓まず、落ち着いて、世界の未開發地開拓は単に日本人だけのためではなく、被開發国並に全人類の福利増進、文化進展のため、天から日本に課せられた大切な使命であることを確信し、誠心誠意、忍耐強く氣長に事を進めねばならぬ。その使命達成上、必要な事項の協議を相手国と直接交渉するか、あるいは国連其他の國際機關を通じてなすかは、時と場合に応じて適宜これを取り運ぶ。

しかし国外移住世界開發の大業に見事成功するために第一に確保せねばならぬ最肝要事は、かかる手段の問題ではなく、日本人が天から托されたこの高い移住奉公の使命をよく理解し、万難を排して世界各地を家となしそこに懸命の奮闘努力を持続する堅固不動の意志これである。世界史を繙きながら痛感することの一つは高い理想と深い信仰崇高真剣な信念に立脚して国外に進出する民族は盤根錯節を見事に踏破し必ず大成するに對し、ただ国内に安居を貪る

民は必ず亡びるということである。「移住は落伍者の逃避所である」などと云う時代遅れの謬想を抱く人が今もなお若干ないでもない。また事実そういう気の毒な立場からやむなく移住した人が昔は若干あったかも知れない。しかしそれに惑わされてはならぬ。現在日本からの国外移住者は絶対にそうであつてはならない。彼等は高い理想と優秀な頭脳手腕を所持し世界開発の高い使命感に生き抜く前途有望な一流人物であつて、よし本国の人口に不足を生ずる場合と雖もその高い使命達成のため敢然国外移住を断行する優秀な人物でなければならぬ。現在日本は国内産業繁栄して人手不足に悩みつつあるは事実である。しかし海外移住に献身する優秀一流人物はそれ以上に不足している。高い理想を抱き永住の決心を以って国外に進出する優秀人物の統出こそ現代日本が最も必要とする最重要事の一つである。

左様な人物はひとり日本にとって必要であるばかりでなく、実に世界が要求して止まぬところである。

世界の農地は僅かに全陸地の一〇％に過ぎず、その何倍もの宝庫が空しく眠っている。これを開発して新文明を建設し全人類の福祉増進に貢献することこそ全人類に対して要求されている天の命令である。しかし既に長年月に亘り高度の文化生活に慣れた第三期人口は最早未開の天地に進出して簡素生活に甘んじつつ重労働に励むに適しない。他方第一期原始民族は概して自国開発の必要を認めずこれに携わるを欲しない。ここに於てその中間第二期の壮年民族の地位にある日本人こそこの未開地開拓の先駆者たる使命を見事に果さねばならぬ重責を天から賦与されているのである。日本はこの使命をよく自覚し其実現に奮闘努力せねばならぬ。

(四) 以上の八項目を満足に実行完成することはもちろん、並大抵のことではない。その途上幾多の困難が山積することは論を俟たぬ。これらの困難を美事に克服して、日本民族が天と人類とに対して抱く責務を遺憾なく果たすには、固よりわれわれ人間が渾身の全精力を傾注して奮闘努力せねばならぬことは論をまたぬが、同時に偉大なる天佑

が絶対に必要である。この天佑なくして、われわれ人間だけが如何に努力しようとも到底この大使命真の完成は実現し得ない。否、われわれの努力そのものすら、天佑無くしては充分に出て来ない、「人間はパンだけでは決して生きることができない。神の口から出る言葉が絶対に必要であると同様に、われわれの仕事は人力だけでは決して満足に完成するものではない。必ず天佑、神助が絶対に必要である。そしてこの天佑、神助を豊かに恵まれる唯一の公道、それは崇高偉大な信仰である。そしてそのような崇高偉大な信仰を与えるものは、これ高級な霊的宗教である。もちろん、宗教は人生全体に関わる重要事である。しかし、私はここに全人類の人口、食糧問題の解決という頗る重大な問題の解決に対し、殊更にその重要性を痛感する。此機に際しわれわれは真に崇高偉大な霊的宗教をしかと確保して、それに帰依し、それが与える豊かな天佑下に奮闘努力することが、第一に必要なものである。かかる堅実な信仰に立脚するとき、如何なる困難が襲来しようとも何等恐るるに足りない。否、困難は却って吾吾を玉に仕上げることは確かである。求めよ、然らば必ず与えられる。叩けよ、然らば門は必ず開かれる。いざ、親愛なるわが同胞よ！ 保て高想、励め刻々！

注

- ① K. M. Maline, Food Resources of the Earth. 参照
- ② 読売新聞、昭和四九年九月一日。
- ③ K. M. Maline, Food Resources of the Earth. 参照
- ④ 読売新聞、昭和四九年七月一六日。
- ⑤ K. M. Maline, Food Resources of the Earth. 参照
- ⑥ Population Bulletin, Population Reference Bureau Vol. XVIII no. 1. p. 10. 及び日本勢図会 1967版 p. 29.